

## スウィフトの生涯 (XIV)

1732年1月のゲイの書簡から、ダブリンに聖パトリック病院  
設立を計画するまで (1732—1735)

### 三 浦 謙

1732年の初頭、スウィフトをイングランドへ呼びよせようとする動きが更めて活発になった。ゲイは1732年1月のスウィフトへの手紙で、「私ばかりでなく、あなたの友人はだれもあなたに会いたがっています。」<sup>(1)</sup> といひ、スウィフトのロンドン訪問をさかんにせきたてている。ポープはスクリブラーラス・クラブ<sup>(2)</sup>のような組織を再度つくることを夢みて同年3月スウィフトへの書信でこういつている。「われわれ3人が集って3年間力を合せば、今日の問題についていい仕事ができるかもしれません。」<sup>(3)</sup> 3人というのはポープ、ボーリンブルック、スウィフトである。

ところが、スウィフトは2月に牧師館で階段から落ちて足を捻挫してしまい怪我は数ヶ月経って治らなかった。スウィフトは捻挫のため家の中にこもり勝ちになり持病の目まいが昂ずるのを恐れた。そこで、スウィフトは馬に乗る時、脚を守るために鞍に結えつけるガムベイドーズ<sup>(4)</sup>という大型のブーツを穿いて、1日約10マイルの乗馬を心掛けた。

怪我が長びくのを心配したゲイが3月に「アムズベリー<sup>(5)</sup>の丘陵地にあるクィーンズベリー家<sup>(6)</sup>の地所なら、いたって土地が平坦だから馬でも人間でも足を踏み外すことはありません。あなたは安心して運動ができます」<sup>(7)</sup> といひスウィフトに転地を勧めたが、せっかくのゲイの話にスウィフトは乗ることができなかった。5月4日のゲイへの手紙で「あなたが手紙を書いてくださった時と同じように私は相変わらずビッコをひいています。……私はアムズベリーへ行っても一歩も歩けません。肉体上の欠陥は政治上の失脚よりもこたえます」<sup>(8)</sup> とスウィフトは嘆いている。

イングランド南部ウイルトシャーのストーンヘンジで名高いアムズベ

リーにはクィーンズベリー一家の所領があり、クィーンズベリー侯夫人キャサリン<sup>(9)</sup>はゲイのパトロンで、スウィフトはキャサリンの子供時分から彼女とは顔馴染だった。

夏が過ぎ秋になると、スウィフトの足の捻挫もほぼ快癒した。10月には一度に2、3マイル歩けるまでになった。

その頃、スウィフトに新たな知己が加わった。第5代オルリー伯ジョン・ボイル<sup>(10)</sup>である。彼は前年の1731年8月父の死後5代目を襲いだが、彼の厳父4代目オルリー伯ジョン・ボイルはかつてのファラリス論争<sup>(11)</sup>の中心人物でスウィフトとは昵懇だった。5代目オルリー伯は1732年アイルランドにあるオルリー家所領の土地の管理問題のためアイルランドに滞在していたが、その間に病弱の妻マーガレットを亡くした。スウィフトがオルリーに初めて会ったのは、ほぼこの時期だった。

1732年10月14日チャールズ・フォード宛の手紙の末尾で「オルリー卿と時々会食します。正直な人のようで性質は良さそうです」<sup>(12)</sup> といっている。オルリーはこの時25歳の青年貴族だった。ほぼ2ヶ月を経過した12月9日の同じくチャールズ・フォード宛の手紙では評価は急上昇し「オルリー卿にはよく会います。どこから見ても申し分のない人物でウィットがあり、謙虚で、儀礼を心得、学者としても優れている」<sup>(13)</sup> といっている。

オルリー卿は1751年『スウィフトの覚え書』を上梓している。これはオックスフォードのクライスト・チャーチ・カレッジ在籍中の子息ハミルトン・ボイル<sup>(14)</sup>宛に24通の書簡形式でスウィフトの人となりと著作を語ったものである。大方は年代順に記述しているが、特異な点はステラの扱いである。第2書簡で彼女をもっぱら取り上げ、ステラはスウィフトの妻であったと断定している。

スウィフトがステラとの関係で書き残した文書はかなりの量にのぼる。だが、スウィフトが1710年9月から1713年3月迄ロンドン滞在中にステラに書き送った「ステラへの手紙」<sup>(15)</sup>、1719年以降彼女が死ぬ1727年迄一時中断はあったがおおむね毎年贈っていたステラの誕生日の祝詩、ステラの病状を気遣ってウォロール師<sup>(16)</sup>、ストップフォード師<sup>(17)</sup>、シェリダン等の友人知己に出した数多くの手紙等、そのいずれをとってもステラがス

ウィフトの妻であったことを証拠立てる文句は見当たらない。オルリーの断定は説得力がないのである。

1732年12月にはスウィフトは突然の不幸に見舞われた。ゲイの死である。病床についてから高熱が続き3日後の12月4日ゲイは他界した。ポープが翌日ゲイの死をおおよそ次のようにスウィフトに知らせた。

ゲイの思いがけない死で私にとって最も親しい紐帯が断ち切られた。内臓と胸のはげしい炎症による高熱で、昨晚9時ゲイは慌しくこの世を去った。死ぬ5時間前までゲイはあなたのことを尋ねていた。

ゲイの家財はクィーンズベリー公爵が管理することになる。遺書があるかどうか今のところわからない。

ああ、なんということだ！ われわれがこの世の舞台から消え去るまでに、なんと死ぬ想いをすることか。友だちを失うたびに自分の身が引き裂かれる思いがする。

アーバスノットの外2人の医師がゲイの臨終を見まもった。アーバスノットは診断した当初から助からないとみていた。

スウィフトは手紙の内容を察知して5日間封を切らなかった。年が明けた1月の23日スウィフトはポープ宛の書簡で「ゲイは私よりもあなたのほうが親しかったので、ゲイの死であなたのほうが大きな傷手を負ったことでしょう。……あなたの世話でゲイの著作集が出ることを望んでいます」<sup>(18)</sup> といっている。

ゲイの遺体は正装のまま安置されてから、ウエストミンスター寺院に埋葬された。ゲイの死を兄弟のように嘆き悲しんだクィーンズベリー公爵はゲイの墓に美しい記念碑を建てた。ゲイの遺産6,000ポンドは未亡人となっていた2人の妹キャサリン・ボーラー<sup>(19)</sup>とジョアンナ・フォーテスキュ<sup>(20)</sup>の間で平等に分けられた。

ところで、スウィフトは1732年6月12日のポープへの書信で「私の詩の泉は涸渇しました。段々、無味乾燥な人間になっているので、私の場合、1つの脚韻を見つけることは1ギニーの金貨を見つけることと同じくらい難しい」<sup>(21)</sup> といっている。ところが、翌年の1733年66歳でスウィフトは大作「ラプソディ」<sup>(22)</sup> を制作している。ほぼスウィフトの同時代人で余り

スウィフトに好意的でなかったゴールドスミス<sup>(23)</sup>も、この詩篇には賞讃を惜しまなかった。彼は「ラプソディ」はスウィフトの詩作の中で最高傑作であり、英語で書かれた詩の中でもきわめて多様な最良の詩篇の一つであろうといっている<sup>(24)</sup>。

スウィフトの「ラプソディ」はシェイクスピアの「ハムレット」の A rhapsody of words そのままに、その用語は多様である。だが、ジョンソンがその英語辞典で定義づけているように、各部が「必然的な依存関係とか自然な結びつきがないままに結合されている」わけではない。スウィフトの「ラプソディ」は詩人のありよう、詩人への忠言を骨格にして、ところどころに人間呪咀と宰相や国王への研ぎすまされた諷刺を据えている。

スウィフトは、まず、うぬぼれほど人間に広く行き渡った情念は知らないという。詩人志望はワンサといるが、詩人といえるのは一時代に3人ぐらいがいいところ。これも人間が愚かでおのれの能力をわきまえないからであろうという。

野獣はおのれの能力がどこにあるかを知っているから、  
熊は空を飛ぼうとはしないし、  
ビッコをひいている馬は  
レースに出場するまえによく考える。  
幅が広くて深い溝を見つけた犬は  
本能的によける。

(13—18)

ところが、

人間は愚かにも  
自然と闘う唯一の生き物である。  
自然が大声で泣く時には、  
頑固さと我慢強さをそこに居据わらせ、  
天賦の才がとてもあろうとは思えないところで、  
愚かにも、おのれの計画全体を振り曲げてしまう。

(19—24)

スウィフトはここで一転して詩人の世俗的な力の弱さを歎く。

宮廷も都市も国もあなたを必要とはしない。

あなたには収賄も裏切りもできないし、陰謀を企てることもできない。

法律は詩人のために、なんの規定ももうけない。

金持ちはあなたを笑い物にする。

政治向きのことを、あなたは知ったかぶりすることはできないし、へつらおうとすると、ぶざまな破目になる。

(47—52)

しかも、実入りはきわめて悪いので経済的には割の合わない生業である。

イギリスを一廻りしても、

あなたの取り分は年間 100 ポンドがやっとのところ。

(53—54)

そこで、詩人を志す者に世に処する道をスウィフトは伝授する。1回2回しくじっても挫けることはない。3回目の詩も世の注目を浴びることがなかったら、宰相や王侯貴族を讃える詩を書くにかぎる。最悪の詩が宮廷で最ももてはやされるからだ。たとえば、

ロップ卿 (ロバート・ウオルポール) を弁護したパンフレットなら

かならず金になるし、

売行きを心配することもない。

ロップ卿は自分のために働いてくれる者へなら即座に金を払う。

(187—190)

だから、詩人よ、繁昌したいと思うならば、

存命中の国王に詩魂を傾けよ。

そして、そのさい慎重に集めることのできる

美德のすべてを集めて一纏めにしたら、

それらを美しい花輪にして、

国王の足下に恭々しく置くのだ。  
国王は花輪の芳香が玉座にとどくと、  
微笑して、すべて、それは玉体の薫香と考える。  
なぜなら法律も福音も共に  
すべての美德は王位に宿ると決めているからだ。

(219 — 228)

二転して、こんどは生物のありようを説きおこす。

ホップズは、どの生物も生まれながら  
戦争状態にあることを明らかに証明している。  
大きいものは小さいものを待ち構えるが、  
自分に相応の者にチョッカイを出すことは滅多にない。  
並の鯨は  
鯨の群れを呑みこむ。  
キツネはガチョウを腹に詰めこみ、  
狼は一頭で千頭もの仔羊を噛み殺す。

(319 — 326)

ところが詩人の場合はそうではない。

すぐれた詩人が下賤な詩人に悩まされる。  
かりに、あなたが英国詩壇最高峰の地位に坐ると、  
あなたは滅多に噛みつくことはないが、噛みつかれるのは  
しょっちゅうだ。  
下々の詩人ことごとくが  
あなたを罵り批判する。

(328 — 332)

これは虫けらの性情と変るところがない。  
虫けらは敵のほうが僅かでも優っていると、  
もっばらいじめにかかる。  
博物学者の観察によると、ノミには

そのノミを食物にする一段と軀の小さなノミがいる。  
 そして、さらに小さなノミが、その小型のノミを刺す。  
 こうした手順は際限なく続く。  
 どの詩人も、このように彼と同種の  
 後から出てくる詩人に噛みつかれるのだ。

(335 — 342)

このほぼ 500 行からなる長詩「ラプソディ」は 1733 年 12 月 31 日 2 つ折判のパンフレットの形で匿名で出版された。匿名にしたのは宰相や国王への辛辣な諷刺がこめられていたためだろうが、翌年 1 月 6 日のスウィフト宛の書簡で、ポープはスウィフトの作品であることを見破り次のようにいっている。「名前を伏せるあなたのやり方は書物を通じて知ったさるインド産の鳥を想わせます。その鳥は頭を穴の中に突っこんで隠すのはいいが、羽と尻尾は外に出したままです」<sup>(25)</sup> 「頭隠して尻隠さずの浅はかな知恵」を ostrich belief という。インド産の鳥とはダチョウのことだろう。

スウィフトはこの詩を Caetera desiderantur (その他は散佚) という 2 語のラテン語で締めくくっているが、未完という意味ではない。これはスウィフトが用いた一種の<sup>とうかい</sup>輶晦の手で前例がある。「書物戦争」も Desunt caetera (以下欠) で締めてあるが、これは未完ではなく、Finis (完結) の結語が添えてある。

スウィフトは 1733 年、「ラプソディ」の外に「さる令夫人への書簡<sup>(26)</sup>」を公けにしている。これは書簡詩となっているが、実はマーケット・ヒルのレイデイ・アチソンとスウィフトとの問答形式の詩で、スウィフトが彼女の怠惰とトランプ遊びを警める内容だが、270 行余りのこの詩の丁度真ん中辺に、時の権臣と国王ジョージ二世を槍玉に挙げているところがある。

邪まな権臣は  
 憎むより愚弄するほうが楽だ。  
 そのほうが正しい答がでる。  
 愚弄は怨恨以上にかれらを苦しめる。

.....

猿が王冠をかぶったら、  
猿のしかめっ面におじけづかなければならないのか。  
猿の在位中は終始、  
お喋りで気取って歩く害虫を摘発できないのか。

(143—152)

この詩は発刊後、官憲の目にとまった。出版業者ウिल्フォード<sup>(27)</sup>が留置され、数日後、印刷業者で書肆のロートン・ギリバー<sup>(28)</sup>が逮捕された。ギリバー訊問の結果、ピルキントン、モットそれに原稿をダブリンから携えてきたバーバー夫人<sup>(29)</sup>が検挙された。だが、しばらく抑留されてから名誉毀損にはならないという決定をみていずれも釈放された。今回の詩も「ラプソディ」も共にスウィフトの作物であることを知ったウォルポールは腹の虫が収まらずスウィフト逮捕に踏み切ろうとしたが、民衆に人気のあるダブリンの首任司祭の捕縛には10,000人の軍隊が必要だといわれて思い留まった。

この時期のスウィフトは心身両面ともはかばかしくなかった。1733年4月5日フォードへの手紙で「ここ1ヶ月目まいがひどいので毎日薬を飲んでます。……暗闇だといつもヨタヨタして頭がスッキリするのは望めません。ここ1年間で椅子つきのカゴ（1人乗りのセダン・チェア）に使った金は、これまで10年間に使った金額を上廻ります……以前に捻挫した脚をまた捻挫しました。ひょっとするとリューマチかも知れません。それでも痛いのをこらえて、4マイルは歩くようにしています……記憶力は半減しましたし、創意は喪失しました」<sup>(30)</sup>といている。1733年5月1日のポープへの書信では、「私があなたの年齢の時は（ポープはスウィフトよりも21歳年下だった）毎日死のことを考えましたが、今では四六時中頭から離れません。それに絶えずつきまとっている目まいが私の年齢以上に心身の不調をつのらせています」<sup>(31)</sup>と訴えている。

だが、スウィフトは屈しなかった。剛毅なスウィフトは前掲の4月5日のフォードへの手紙を次のように結んでいる。「不埒者を矯正しないまでも、せめて苛立たせることに役立てば、機知ある人間はすべてその機知を諷刺に用いるべきだと私は思います。その方面の私の才能が私の気質を気



難しくするとしましても私は諷刺以外に筆を染める気はいたしません」<sup>(32)</sup>

このような気概が病苦に苛まれ、記憶力と創意の減退を託ちながらもスウィフトに「ラブソディ」のような大作を生ませたのである。

ところで、1734年1月には26日付のダブリン・ジャーナル紙を通じてスウィフト死亡説が流れた。事実ではないとわかった時ダブリン市民は胸をなでおろしたが、こうした噂が新聞紙上にとりあげられた背後にはスウィフトのはかばかしくない体調の外にベッツワース<sup>(33)</sup>との一件が尾を引いていた。

前年の12月、リンネル業者への十分の一税を当該産業育成のため軽減する法案が下院に上程される動きがあった。ところが、リンネル業者は北部のプレズビテリアンが中心で彼らはとりわけ国教会に十分の一税を支払うことを嫌っていた。スウィフトは法案によって恩恵を被るのが国教会に極めて批判的なプレズビテリアンであり、教会収入も削減の方向に向うところから法案に反対した。スウィフトは亜<sup>フックス</sup>麻と大麻<sup>ヘムブ</sup>は地力を低下させ農業に有害だなどというコジツケまで口にした。

この時、リチャード・ベッツワースなる上級法廷弁護士兼下院議員が当法案に積極的な賛意を表したのである。

スウィフトはそこでプレズビテリアンを揶揄する戯詩<sup>(34)</sup>を書き、その中でベッツワースを次のようにあからさまに攻撃した。

かくして<sup>さばき</sup>審判の場にあっても、あの間抜けたベッツワースは、  
法律の本文も欄外の注も心得ぬのだから、  
彼が流す汗水の報酬に半クラウンも多過ぎようが、  
シングルトン<sup>(35)</sup>を厚顔にも同僚の弁護士だといっている。

(25—28)

シングルトンとは当時主任上級弁護士であったヘンリー・シングルトンのことである。彼はその後、民事訴訟主任裁判官<sup>(37)</sup>と記録長官<sup>(38)</sup>に栄進した。シングルトンを当代一流の人物として高く評価していたスウィフトは彼を自分の遺言執行人の一人に指名している。

さて、スウィフトの嘲弄に腹を立てたベッツワースは牧師館にスウィフトを訪ね、留守とわかると立寄先へ押しかけ、スウィフトの耳を削ぎ落す

とって脅迫した。

この騒動は1月5日、8日、12日付のダブリン・ジャーナル紙に活字になり、29日付の同紙にスウィフトの死亡説が出たのだから、不穏な空気の中でスウィフトが凶事に遭って死んだのではないかという臆測が生まれても不思議ではなかった。

ベッツワース騒動の熱気がさめるとスウィフトはシェリダンとの交友を楽しんだ。2人はしばしば会食している。1724年1月28日のスウィフト宛のシェリダンの手紙ではシェリダン宅での夕食の献立を次のように紹介している。

献立表はこんな具合です。ガチョウ；アヒル；ヒラメ、カレイといった魚；プディング；フリカッセ；ウサギのシチュー；とりたてのエンドウととりたてのインゲン；それに仔羊のパイ。まさに大臣向きの料理です……飲物のマーゴウ<sup>(39)</sup>の赤ブドー酒はルビーのような美酒だし、サイプラス<sup>(40)</sup>は私がこれまで酒場で飲んだどれにもひけをとらないすばらしいサイダーです<sup>(41)</sup>。

この手紙の中で言葉遊びが得意なシェリダンは直喩<sup>シミリー</sup>をさかんに持出し、「私は彫像のようにおし黙り、熊手のように痩せ衰え、毒ヘビ<sup>アッダー</sup>のように耳が聞こえず、腐った酢のように気が抜けてしまっているが、一時はご婦人の下腹にとまったノミのように敏捷でした」<sup>(42)</sup> といっている。

それに、シェリダンはスウィフト宅での会食にはぜひ女性を同席させてほしいと願っている。シェリダンのお好みの女性はお喋りや浮気女<sup>フレイター</sup>ではなく、重々しい首任司祭や重々しい教師にふさわしい品位ある年長の女性だった。

1734年11月には、ジェントルマンズ・マガジン紙<sup>(43)</sup>に、ツンボと目まいを歎くスウィフトの詩<sup>(44)</sup>が掲載された。

ツンボで目まい、施す術がなく、独りとり残されている、  
どの友人にも重荷となってしまった。

私を吊う鐘の音が打ち鳴らされても私には聞こえないように、  
私の教会の鐘の音はもはや私には聞こえない。

荷車の騒音に驚くことがないように、  
今の私は雷鳴に驚くこともない。

(1-6)

スウィフトにこのような詩を書かせたのは4ヶ月以上にわたってスウィフトを牧師館に釘づけにした業病の外に、この年イングランドからの音信がめっきり減ったことだった。とくに、ポープからの便りがなかったことがスウィフトにはこたえた。同年8月オックスフォード伯ハーリーへの手紙で、「ここ何ヶ月もポープから音沙汰がありませんので、すっかり見捨てられたような気がします」<sup>(45)</sup>とコボしている。

それに、久しぶりに受けとったアーバスノットからの書信もスウィフトをうちのめした。水腫と喘息でこの愛すべき医師は食事も睡眠も思うようにとれなかった。このスウィフトへの最後の手紙でスウィフトと同年のアーバスノットは次のようにいっている。

神に召されることを私は真底念願しています……私の年では病状は和いでも回復は望めません……私は今入港間近かで海に吹き戻された人間のようにです。でも、安息の地へは行けそうな気はします。これで苦難の地を離れることができるのは間違いありません<sup>(46)</sup>。

だが、スウィフトをやさしく元気づける友人がないわけではなかった。その1人はペンダーヴズ夫人<sup>(47)</sup>である。彼女は1734年9月次のような書き出しの手紙をスウィフトに送っている。

あなたさまのお便りはナイチンゲイルの歌声のようです。ナイチンゲイルほど美しい歌声の鳥はおりません。でも、歌声を聞く喜びは束の間で、1, 2ヶ月過ぎれば来春まで聞くことはありません。ナイチンゲイルの歌声のようにあなたさまのお便りがまた私の元に届くことを願っております<sup>(48)</sup>。

ペンダーヴズ夫人はランズダウン卿<sup>(49)</sup>の弟バーナード・グランヴィル<sup>(50)</sup>の娘で、60歳に近いコーンウォールの地主アレキサンダー・ペンダーヴズ<sup>(51)</sup>と結婚した時は18歳未満だった。7年後夫と死別し、1743年スウィ

フトの友人パトリック・デラニーと再婚している。スウィフトと識り合ったのは1733年頃で、その後3年間スウィフトと親しく交信している。

9月9日付のペンダーヴズ夫人からの手紙の返書として書いた10月7日の彼女への手紙でスウィフトは次のように答えている。

ここのところ、目まいとツンボが同時に私を見舞うようになりました。めまいは私の軀をいためつけ、ツンボは会話を不可能にさせます……でも、あなたの楽しい便りのおかげで私は軀の不調を3日間忘れました……これまで間近かであなたを見守ってきたけれども、あなたには不都合なところはなに一つありません。あなたは私がこれまで知ったどの女性よりも私にとって変ることのない女の鑑です<sup>(52)</sup>。

こう手離しで賞めた後で、次のように揶揄っている。

これまで私が接してきた女性の多くは1ヶ月か1年で馬が突然後肢で蹴り上げるように私を蹴りつけて私の元を去っていきました。あなたも1年たったら私を蹴飛ばして私から遠去かるのはご自由です<sup>(53)</sup>。

これに対し、ペンダーヴズ夫人は11月20日のスウィフトへの手紙で「あなたさまを蹴飛ばして見限るようなことは決していたしません」<sup>(54)</sup>といい、前の手紙でふれた彼女へのスウィフトのことほかの讃辞をかけがえのないことばとして喜んでいる。

1734年11月、スウィフトとステラの世話をいとわなかった聖パトリック大聖堂の教区牧師ジョン・ウォーロール師の妻が死んだ。訃報は図らずもスウィフトの誕生日である11月30日のダブリン・ジャーナル紙に載った。スウィフトには大きな打撃だった。淋しさを紛らすためか、スウィフトはこの頃牧師館でさかんにトランプに興じている。相手はホワイトウェー夫人とその子息のセオフィラス・ハリスン<sup>(55)</sup>、ウォーロール師、ヘルシャム<sup>(56)</sup>等だった。

翌年の1735年2月27日ジョン・アーバスノットがロンドンのコーク・ストリートの自宅で死んだ。遺体は3月4日ピカデリーのセント・ジェイムズ教会<sup>(58)</sup>に埋葬された。失意のスウィフトは5月12日ポープへの手紙で次のようにいっている。

ゲイとアーバスノットの死は私に手酷い傷手になりました。彼らの存在は私には大きな慰めでした。利子が貰える銀行預金のように2人を見たことは一度もありません<sup>(59)</sup>。

アーバスノットの死は一時代を風靡したオーガスタン・ウィッツ<sup>(60)</sup>の間近かな終焉を物語るものだった。1719年にはアディン、1729年にはスティールとコングリーヴ、1731年にはデフォー、1732年にはゲイがそれぞれ死んだ。そして1735年のアーバスノットの死を悼むポーブとスウィフトは最晩年の10年を迎えていたのである。

1735年春、アーバスノットの死後間もなく、スウィフトは再び不幸に見舞われた。スウィフトが北アイルランドのキルルートで聖職に就いていた若年の頃からその身の廻りの世話をしていたブレント夫人が他界した。ブレント夫人の後はその娘のリッジウェー夫人とスウィフトの姻戚関係にあるホワイトウェー夫人が継いだが、スウィフトはホワイトウェー夫人のほうを頼りにしていた。ホワイトウェー夫人はスウィフトの一番下の叔父アダムの末子である外、彼女が17歳の時結婚した最初の夫セオフィラス・ハリソンの母はスウィフトの大伯父ゴドウィンの最後の妻であった。それに、ホワイトウェー夫人の死別した2番目の夫エドワード・ホワイトウェーとの間で儲けた末息子ジョン・ホワイトウェー<sup>(61)</sup>は18世紀のアイルランドにおける最も優れた医者 of 1人であった。彼はスウィフトの遺言で建てられた聖パトリック病院の外科医でスウィフトの死後、その遺体解剖を行っている。スウィフトは浅からぬ因縁のあるホワイトウェー夫人とその子供たちとの触れ合いを通じて一種の家庭的なぬくもりをも味わうことができた。

ところで、シェリダンは1735年5月5日生地キャバンで開校になったフリー・スクールの校長として当地に赴任することになる。同年6月23日付の手紙でシェリダンは次のようにキャバンでの静養をスウィフトに勧めている。

こちらのマトンは最高です。ビーフ、鱒、キジ、とりわけウナギが格別です。こちらへ見れば、あなたの体調が良くなるばかりか、空気がいいので、食欲が出て肉づきもよくなるでしょう。

……私の顔を見る人はたれしも、私が10年若くなったといっています<sup>(62)</sup>。

スウィフトは牧師館での諸事にかまけて断ったが、シェリダンが、その後もひき続き勧めるので2年に1回のアイルランド国会が開かれる頃キャバン訪問を約束した。「クラブ」<sup>(63)</sup>とよばれていたアイルランド国会の開期中ダブリンにいることをスウィフトは好まなかった。

スウィフトがくるとわかると10月5日の手紙でシェリダンはダブリンからキャバンまでの細かい日程に加えて「時々マトン・チョップを焼くからチーズ・トースターを持ってくるように。それにライスも忘れないように。こちらにいる間は「クラブ」に悩まされることはない。宿舎が気に入らなければ一文も払わなくてもいい」などといっている。

スウィフトは11月3日にダブリンを立って3日後キャバンに着いた。ところが、シェリダンの話とは裏腹で、はなはだスウィフトの気に入らなかった。11月8日ホワイトウエー夫人への手紙で「キャバンにきて3日になるが、こんな不潔な処はない」<sup>(64)</sup>とこぼしている。こぼすことは外にもあった。部屋はむさ苦しくて湿気が多く、その上調理が下手だった。小ガモのローストはいいが、焼きすぎて消し炭みたいにする仕末だった。

キャバンへ向う途中で向う脛を怪我して好きな散歩と乗馬ができなくなったこともスウィフトの気持ちを余計沈うつにさせた。スウィフトの怪我を心配したホワイトウエー夫人は卵の黄味を糊のようにして傷口に当てるとかテレピン油を塗るようにとかいう指示をしている。

だが、キャバンはツグミ、マガモ、小ガモ、ヤマシギ他野鳥が豊富で、どれも安くてうまかった。スウィフトは11月半ば過ぎた頃から体調がよくなり太ってきた。この頃シェリダンはスウィフトがよく食べるので金がかかるがスウィフトからは週2クラウンの手当しか貰っていない。増額するように伝えてほしいとホワイトウエー夫人に訴えている。

こうして、ブツブツいいながらも11月30日の自分の誕生日もダブリンに帰らずスウィフトは12月までキャバンに滞在した。

キャバンからの帰館後、毎週日曜日夕刻の牧師館でのパーティは相変わらず続いていた。1735年7月17日のオルリー卿への手紙でスウィフトは

「この町で楽しい人の集いがあるとしても私には全く不案内です。ただ、毎週日曜日夕刻、私を当<sup>あて</sup>に 10 人の人間が牧師館にやってきます」<sup>(65)</sup> といっている。

1735 年 6 月にはスウィフトはハウス卿<sup>(66)</sup>の需<sup>もとめ</sup>に応じてアイルランドの画家フランシス・ビンドン<sup>(67)</sup>に全身像の肖像画をハウス・キャッスル<sup>(68)</sup>で描かせている。だが、僧衣を纏ってドレイピア第四書簡と書かれた巻物を左手に握っているこの肖像画はどうもスウィフトの気に入らなかった。6 月 15 日のシェリダンへの手紙で「ビンドンのモデルになって 2 時間半坐っていた私が馬鹿だった」<sup>(69)</sup> と悔んでいる。

1735 年 7 月にはスウィフトは遺書<sup>(70)</sup>を書いている。7 月 17 日のオルリー卿への手紙で、スウィフトは次のようにいっている。

死にかかっている人間みたいに、混み入った雑務を処理するのに数ヶ月かかりました……私は今正式の遺書を書き終えたところです。私は全財産をダブリン市に委託し、痴呆と狂人向けの病院の建設と維持に使ってもらうことにしました<sup>(71)</sup>。

スウィフトが精神病院建設の意志を最初に露わにしたのは、すでに触れた 1731 年の長詩「スウィフト博士の死にさいして」<sup>(72)</sup> においてである。スウィフトはこの詩の末尾で、

彼は僅かな遺産を愚者と狂人を収容する  
施設の建設に当てることにした。  
そして諷刺の筆で、彼はアイルランドほど  
かかる施設を必要とする国はないことを示した。

(479 — 482)

といっている。

スウィフトは早くから貧者を対象にした学校や病院の建設と運営に関心があった。1714 年ロンドンを出立する前にはスウィフトはアッタベリー<sup>(73)</sup>と共にベドラム<sup>(74)</sup>の理事に選ばれているし、その 2 年後には彼の教区の貧家の子を対象にした慈善学校の設立に尽力したり、ダブリンの救貧院と棄子病院にも理事として名を列ねている。1725 年にダブリン最大の慈善学

校ブルー・コート<sup>(75)</sup>の理事に指名され、1733年にはダブリンの富裕な医師リチャード・スティーヴンズ<sup>(76)</sup>の遺志で建てられたステーヴンズ・ホスピタル<sup>(77)</sup>の最も初期の理事の一人をも務め、1735年にはメリー・マーサー夫人<sup>(78)</sup>の遺言で慢性病の病院設立のため遺産の管理を任せられた一人になっている。

だが、こうしたスウィフトの慈善活動の中で最も目ぼしいのがスウィフトの死後にはなかったがアイルランドにおける最初の精神病院となった聖パトリック病院<sup>(79)</sup>の開設である。スウィフトの遺志を継いで、1757年50人の入院患者を受け入れて聖パトリック病院が開院するまではアイルランドの精神病者は監獄か救貧院に押しこめられていた。ベッドは滅多に取換えられることのない藁で、換気の悪い暗室で起居する患者の多くは裸同然だった。患者の暴力を抑えるためには手錠と鞭と鎖が用いられ、施す医療といえば、放血か吐剤を飲ませるぐらいが精々のところだった。1704年以降ダブリンにいくつか開設された救貧院は同室者に暴力を加えるなどの理由から遂には精神病者の受け入れを拒否するまでになった。こうして、路傍に投げ出された精神病者には聖パトリック病院の開設まで、まともな避難場所はなかったのである。

まともといえば、ロンドンのベドラムと較べるとき、ダブリンの聖パトリック病院には開業当初から一つの際立った特色があった。それは入院患者の来訪者への公開を禁止した点である。当時ロンドンの観光名所の一つになっていたベドラムは安い参観料で入院患者を見世物にしていた。ダブリンの聖パトリック病院が悪しき先例に倣わず参観禁止を当初から打ち出したのは、あるいはベドラムの理事を経験していたスウィフトの志であったのかもしれない。

## 注

- (1) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, p.3.
- (2) Scriblerus Club. 既出. cf. 「スウィフトの生涯」 VII p. 9.
- (3) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV. p. 8.
- (4) gambadoes.
- (5) Amesbury.



- (6) The Queensberrys.
- (7) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, p. 9.
- (8) Ibid., p. 14.
- (9) Catherine, Duchess of Queensberry. 生歿年未詳。
- (10) Boyle, John, 5th Earl of Orrery (1707-62).
- (11) Phalaris controversy. 紀元前6世紀中頃のシシリーの僭主であったファラリスの書簡集が4代目オルリー伯ジョン・ボイルの編集で1695年に刊行された。スウィフトの恩人サー・ウィリアム・テムプルはこれを激賞したが、当時の古典学者リチャード・ベントレーは偽作であることを確証した。cf. 「スウィフトの生涯」IV p. 6.
- (12) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, p. 77.
- (14) Boyle, Hamilton. 生歿年未詳。
- (15) *Journal to Stella* cf. 「スウィフトの生涯」VI p. 9.
- (16) Worrall, John (d. 1751).
- (17) Stopford, James (c. 1697-1759).
- (18) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, p. 104.
- (19) Baller, Katherine.
- (20) Fortescue, Joanna. (12) (20) 生歿未詳。
- (21) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, p. 31.
- (22) *On Poetry: A Rapsody* (1733).  
(*The Poems of Jonathan Swift*, Vol. II, pp. 639-659).
- (25) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, pp. 217-218.
- (26) *An Epistle to a Lady* (1733). (*The Poems of Jonathan Swift* Vol. II, pp. 628-638)
- (27) Wilford, John.
- (28) Lawton Gilliver.  
(27) (28) 生歿年未詳。
- (29) Barbr, Mary (c. 1690-1757). ダブリンの反物商 Jonathan Barber の妻。
- (30) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, pp. 136-137.
- (31) Ibid., p. 152.
- (32) Ibid., p. 138.
- (33) Bettsworth, Richard (c. 1687-1741).
- (34) *On the Words-Brother Protestants, and Fellow Christians, so familiarly used by the Advocates for the Repeal of the Test Act in Ireland, 1733.*  
(*The Poems of Jonathan Swift* Vol. III, pp. 811-813).
- (35) Singleton, Henry (c. 1682-1759).
- (36) Prime Serjeant.
- (37) Chief Justice of the Common Pleas.

- (38) Master of the Rolls.
- (41) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, pp. 237-238.
- (39) Margoux.
- (40) Cyprus
- (42) *Ibid.*, p. 237.
- (43) *The Gentleman's Magazine*.
- (44) *Written by the Reverend Dr. Swift. On his own Deafness. (The Poems of Jonathan Swift* Vol. II, pp. 673-674).
- (45) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, p. 249.
- (46) *Ibid.*, p. 256.
- (47) Pendarves, Mary (d. 1788).
- (48) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, p. 251.
- (49) Lord Lansdown.
- (50) Granville, Bernard.
- (51) Pendarves, Alexander. Cornwall (イングランド南西端)の富裕な地主。(49)  
(50)(51)生歿年未詳。
- (52) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, pp. 257-259.
- (53) *Ibid.*, p. 259.
- (54) *Ibid.*, p. 271.
- (55) Harrison, Theophilus (1712-1735).
- (56) Helsham, Dr. Richard (c. 1683-1738). 医者。スウィフトの遺言執行人の一人。
- (57) Cork Street.
- (58) The Church of St. James in Piccadilly.
- (59) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, p. 334.
- (60) The Augustan wits.  
諷刺文学が隆盛した18世紀イングランドで活躍したアディソン、スティール、ゲイ、スウィフト、ポープ、アーバスノット等の文人をいう。
- (61) Whiteway, John (d. 1797).
- (62) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, p. 355.
- (63) Trinity College, Dublin の前のグリーンにあったところから the College Green Club 略して the Club といわれた。
- (64) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, p. 416.
- (65) *Ibid.*, p. 367.
- (66) Howth, the Baron of. 生歿年未詳。
- (67) Bindon, Francis (d. 1765).
- (68) Howth Castle. 1727年に26代目を襲いだ the Baron of Howth の所有だった。

- (69) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, p. 352.
- (70) この遺書は今日残っていない。スウィフトは1740年に最終の遺書を書いている。これについては更めて触れる。
- (71) Op. cit. pp. 366-367.
- (72) *Verses on the Death of Doctor Swift* (1731) cf. 「スウィフトの生涯」XIII, p. 5.
- (73) Atterbury, Francis (1662-1732). Bishop of Rochester.
- (74) Bedlam. cf. 「スウィフトの生涯」IV p. 11.
- (75) The Blue Coats.
- (76) Steevens, Richard (c. 1654-1710).
- (77) Steevens' Hospital.
- (78) Mercer, Mrs. Mary. 生歿年未詳。
- (79) St. Patrick's Hospital.

#### 主要参考文献

- Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1969).
- Temple Scott, ed., *The Prose Works of Jonathan Swift*, D. D. (London, 1908).
- Sir Walter Scott, ed., *The Works of Jonathan Swift*, D. D. (Edinburgh, 1824).
- Irvin Ehrenpreis, *Swift* (Methuen, 1983).
- Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift* (Oxford, 1972).
- Harold Williams, ed., *The Poems of Jonathan Swift* (Oxford, 1966).
- Jonathan Swift, *The Intelligencer* (AMS Press, 1967).
- Robert C. Steensma, *Dr. John Arbuthnot* (Twayne Publishers, 1979).
- The Legacy of Swift*, (A Bi-Centenary Record of St. Patrick's Hospital, Dublin 1948).